

[資料紹介]

東北大学日本史研究室所蔵の喜田貞吉関係資料について

伊 藤 大 介

[資料紹介]

東北大学日本史研究室所蔵の喜田貞吉関係資料について

伊藤大介 (Daisuke ITOH)*

はじめに

喜田貞吉（1871—1939年）とは近代日本を代表する歴史家であり、法隆寺再建論争の主要な論客などとして知られている。また、考古学や民俗学の成果を積極的に取り入れることによって、日本の歴史学に大きな業績を残したと評価されている。さらに、文部省時代には歴史教科書の検定や編集に携わり、政治問題にまで発展した南北朝正閏問題の当事者となるなど、歴史教育の歴史における重要人物でもある。

南北朝正閏問題で文部省を退職になってからは京都帝国大学において教鞭をとった後、1924年（大正13）以降は東北帝国大学の講師として過ごした。法文学部の国史研究室（現在は文学部の日本史研究室）において研究や教育活動に従事しながら、東北・北方史関係史料の調査研究をおこなう奥羽史料調査部（現在は東北文化研究室）の発足に尽力するなど、1939年（昭和14）に死去するまで、幅広い活動をおこなった。

本稿で取り上げる「喜田貞吉関係資料」とは、2000年（平成12）ころに東北大学の日本史研究室で発見された資料のことである。古文書室という、古文書や雑誌などを収納している部屋から、段ボール箱に詰められた状態で見つかったそうである。一部の資料に「喜田」という表記があり、状況から考えても喜田貞吉に関わる資料である可能性が高いと判断されて保管されたものである。

喜田貞吉関係資料は、全部で10点の冊子からなる資料群であり、その構成は次の通りである。なお、資料の番号は、収納されていた状態を記録するために、上部の資料から番号を付していった。

資料1. 大名城池沿革

資料2. 諸侯年表 全

資料3. 大名所領表（上）／畿内・東海上

資料4. 大名所領表（中）／東海下・東山

資料5. 大名所領表（下）／北陸・中国・四国・九州

資料6. （城池と藩主家と双方から見た）／徳川大名沿革一覧（一）／（幕末大名）

* 東北大学東北アジア研究センター

資料7. 地理学講座／大名領地沿革概説二／常陸、近江、美濃、信濃、上野、下野

資料8. 地理学講座／大名領地沿革概説三／奥羽、北陸迄

資料9. 徳川大名沿革概説四

資料10. 徳川大名沿革概説五 止

ちなみに資料8には、ハガキ1枚が挟まれている（ハガキについては後述）。また、これらの資料は、その内容や形態などから次の二種類に分類することができる。

資料1～5（大名所領関係資料）

資料6～10（地理学講座原稿）

本稿においては、この分類ごとに検討を加え、その詳細について分析するとともに、本資料の位置づけなどについて考察することとする。

1. 大名所領関係資料

この分類に含まれる資料1～5は、ノートを製本したと考えられる5点の冊子である。表紙などには特に記述がないものの、背表紙には「大名城池沿革」や「大名所領表（上）／畿内・東海上」などというように「はじめに」で紹介した資料名が印刷されている。また、いずれの資料にも背表紙の下部に「喜田」と右横書き（右から喜→田）の印刷が施されており、喜田貞吉が作成・製本したものと考えられる。



大名所領関係資料

いずれの資料も縦16.5センチ、横20センチ、幅4センチ弱程度の大きさ。
製本された状態で保存されていた。

この製本された資料1の最初の頁には、喜田の自筆で、次のような「目次」が記されている。

目次

- 一、国別城池沿革
- 一、藩高一覧
- 一、元禄・天保 郡別石高表
- 一、紙幣発行諸藩領分表

資料1が複数の内容から構成されていることはこの目次部分からも明らかである。また、その体裁からも別々に使用されたノートを含冊して製本されたことがうかがえる。つまり、資料1は、複数の性格を持つ資料を合わせて作成されたものと考えられる。

また、資料2～5は、ノートの合冊である点は資料1と同様であるが、ほぼ同形式で同種の用紙を使用しており、内容的にも統一のとれたものである。このことから、資料2～5は、同じような作業記録である複数のノートを合冊して作成された資料と考えられる。あるいは、それらのノートは合冊を意識して記された可能性もある。

資料1の内容は、前述の「目次」にあるように近世大名の領地沿革や石高に関する資料集のようなものである。また、資料2は背表紙に「諸侯年表」とあるように大名たちの年表が、資料3から資料5は「大名所領表」として大名所領の詳細が、それぞれ書き込まれており、ほぼ資料名の通りの内容が記されているといえる。

なお、いずれの資料も、基本的には喜田貞吉以外の人間による書き込みが大部分であり、一部の記述を除くと、喜田はところどころにメモを記入している程度である。喜田は、資料やデータの筆写を他者に委ね、自身は目を通してチェックするという役割を担当していたと考えられる。

ただし、資料1の「藩高一覧」部分の冒頭には、単なるメモ書きやデータの機械的な入力ではない、喜田自身によるまとまった書き込みが残されている。ここでは、その部分を目ごとに【資料A】と【資料B】として紹介する。ちなみに、喜田の筆跡については、『喜田貞吉著作集』全14巻（1979～1982）の口絵部分や、佐伯啓造（編）『唐招提寺の新研究 南都七大寺叢書巻三』（1940）などに自筆原稿が掲載されており、それらの資料と比較して自筆であると判断した（注1）。

【資料A】

- 一、藩の沿革帳石高と藩制録租税仕上高比較概略簿記之通ニ有之
藩制録ハ沿革調高ト相当ハ勿論ニ候処違往々有之又ハ藩制録トハ

違ト雖モ租税ノ高ニ相応モ有之ニ付沿革帳高上地代地之區別
ヲ差違シ四年受渡高ニ相当之分石以下違之分ハ決数ト認メ以上之
違ハ再調之事

- 一、上地代地ハ沿革帳石高藩制録租税仕上高不相当之分ハ領知目録等ニ突
合之印（右脇に「高？」…引用者注）数判然石高仕訳（右脇に「ママ」…引用者注）一
端代地ニ賜高上地郡限りニテ村換再代地モ
有之上地代地高割付ハ孰モ員数少ハ違アルト雖多分之異同無之候事
 - 一、預所附等之分ハ尚存廢調査之事
 - 一、陸羽藩所轄高之内被召上之村差又ハ更ニ高下賜候分之差村不
明瞭も有之尚調査之事
 - 一、宮堂上華族地下官員之區別之事
 - 一、藩之名称明治元年前後之區別之事
- 右ハ一己之編集ニ付御両君ニテ御検査有之度候

十月

若宮君 （大山義郎）

松村君

【資料B】

本書は地理局員大山義郎の編纂にして藩高一覧と題し左の八項に分つ、

- 一、藩高上地代地及過不足調 此方謄写を略す
- 二、藩名改称及別藩名称 此 } 五七頁
- 三、藩高国限 沿革帳 藩制録
租税仕上高 領知目録 対照 } 一頁 附諸藩預所一覽 三七頁
- 四、郡代支配所 } 四一頁
- 五、代官支配所 } 四九頁
- 六、役知 } 五一頁
- 七、御料及附属 } 五一頁
- 八、宮堂上以下地下官人高調

右を内務属若宮銀二郎氏より借り抄録にて、明治四十一年一月四日磯部旅舎
三景楼にありて望畢る 喜田

ここで引用した【資料A】と【資料B】は、頁の裏表に記入されている。

【資料A】は、その内容から、主に諸藩の沿革・石高に関する「藩高一覧」についての凡例

や断り書きのような文章と考えられる。本文の右脇に「高？」や「ママ」といった記入が見られることから喜田が筆写したものと思われ、文末にある「(大山義郎)」という記述はその文責者を示していると考えられる。

また、文中に「尚調査之事」として将来的な課題を提示していたり、その文末に「右ハ一己之編集ニ付御両君ニテ御検査有之度候」として「若宮君」と「松村君」に内容のチェックを要請していたりすることなどから、この文章は、その内容を解説しているだけでなく、作業途中の指示や連絡のために書かれた側面もあると考えられる。なお、文中の「十月」は、大山が若宮たちに「藩高一覧」を渡した時期と思われるが、その詳細は不明である。

【資料B】は、喜田自身の筆による「本書」についての解説文と考えられる。その内容としては、「本書」すなわち資料1に含まれる「藩高一覧」部分は、「地理局員大山義郎」が編纂した「藩高一覧」を「内務属若宮銀二郎」から借り受けて、「抄録」つまり抜き書きしたものであることがわかる。また、「明治四十一年一月四日」という日付は、作業が一段落した時期と考えられる。ちなみに、「三景楼」とは、島崎藤村の定宿としても知られる群馬県安中市の磯部温泉の宿であり、現在は「磯部館」という名称になっている。

なお、【資料A】の末尾に記されていた「若宮君」は、【資料B】における「内務属若宮銀二郎」と同一人物と考えられる。大山義郎と若宮銀二郎は、ともに内務省地理局文書課の職員であり、同様に「松村君」は同課の松村知之であると推測できる(注2)。

これらの資料から、喜田による近世大名の所領や沿革の調査は、内務省から資料を借用するなどしながら進められていたことがうかがえる。また、複数の種類のデータから構成される資料1が先行して実施した基本調査の成果であり、同種のデータごとに合冊された資料2~5がそれぞれのテーマや地域ごとに編纂したものと位置づけるのであれば、喜田による調査活動は、遅くとも【資料B】に記された1908年(明治41)ころからおこなわれていたと考えられる。

2. 地理学講座原稿

この分類に含まれる資料6~10は、原稿用紙をヒモで綴じた5点の冊子である。表紙には「徳川大名沿革一覧(一)」や「地理学講座/大名領地沿革概説二」などというように、「はじめに」で紹介した資料名が喜田の自筆で記入されている。

その内容としては、地域ごとの大名領地および大名家の沿革などが記されている。表紙以外には喜田の自筆部分はあまりなく、資料1~5の「大名所領関係資料」と同様、他者に執筆させたものをチェックしていたものと考えられる。ただ、資料7には喜田自身が執筆している部分も数十頁あり、全面的に委ねていたわけでもなかったようである。

いずれの資料にも「東北帝国大学法文学部/国史研究室」という印があり、喜田個人ではなく研究室で管理していた可能性も考えられる。なお、資料6から資料10にかけて、それぞれの



地理学講座原稿

いずれの資料も縦23センチ、横16センチ、幅1センチ強程度の大きさ。
ヒモで綴じられた状態で保存されていた。

タイトルに「一」から「五」までの数字が含まれており、連続して作成された原稿と思われる。

資料6の表紙には「地人書館発行／地理学講座掲載／（一五頁より五二頁迄）三八頁」との書き込みがあり、これらの原稿は「地理学講座」という書籍に掲載されたと思われる。また、資料6の1頁目には「採字／7. 3. 31／終了」との印があり、資料7と資料9にもそれぞれ「採字／7. 6. 8／終了」と「採字／7. 8. 28／終了」との印がある（ただし資料8と資料10には見られない）。このことから大正か昭和の7年に印刷業者が関わっていたと思われるが、東北帝国大学に赴任したのが1924年（大正13）であることを考え合わせると、1932年（昭和7）のことと推定できる。

1932年当時の喜田の執筆活動について、その「著作目録」を参照したところ、「昭和七、五一—一一／徳川大名封邑居所沿革概説（日本の歴史地理続編）／地理学講座／一三—一五」という著作が紹介されており（注3）、これらの文献と照合してみた結果、資料6から資料10はその原稿の一部であることが判明した。

それぞれの対応関係は次の通りである。

資料6は、喜田貞吉「日本の歴史地理〔続〕」（『地理学講座 第十三回配本』地人書館、1932年5月）の109～146頁（135～172頁）に掲載されている「幕末大名封邑居所沿革一覧」部分の原稿。

資料7および資料8は、喜田貞吉「日本の歴史地理 [続]」(『地理学講座 第十四回配本』地人書館、1932年8月)の11~66頁(173~228頁)に掲載されている「幕末大名封邑居所沿革一覧」部分の原稿。

資料9および資料10は、喜田貞吉「日本の歴史地理 [続]」(『地理学講座 第十五回配本』地人書館、1932年11月)の87~138頁(229~280頁)に掲載されている「幕末大名封邑居所沿革一覧」部分の原稿。

以上のことから、資料6から資料10は、1932年に『地理学講座』に掲載された「日本の歴史地理」の「幕末大名封邑居所沿革一覧」部分の原稿であることが明らかとなった。なお、資料8と資料10に採字印がなかったのは、同号に掲載されている資料7と資料8、資料9と資料10とが一括して扱われていたためと考えられる。

また、資料8にはハガキが挟まれている。ここでは、その資料を【資料C】として紹介する。

【資料C】

<ハガキ表>

仙台市東二番丁八六

虎岩様方

山本柝蔵様

東京市小石川区東青柳

町一〇 喜田新六

<ハガキ裏>

長々御無沙汰致して居ります。

御変りもなく御暮しの事と存じます。

此度「源氏物語関係書解題」を御恵

贈下されありがたう存じました。又先日

兄に御託し下さった仙台市電パンチ集

受取りました。厚く御礼申し上げます。

このハガキは、喜田新六が山本柝蔵に宛てたものであり、内容的には「源氏物語関係書解題」を受け取ったことについての礼状である。また、「小石川/7/10. 4/后8-12」との消印があり、【資料C】を挟んでいた資料8の作成年代から考え合わせると、1932年(昭和7)10月の資料と判断できる。

このハガキの作成者である喜田新六とは喜田貞吉の二男であり、のちに神宮皇学館、戦後は

中央大学で教鞭を執った歴史学者である。1932年当時は、東京帝国大学文学部大学院に在籍しながら文学部副手を務めていた（注4）。そして、ハガキの宛先である山本柝蔵とは当時の東北帝国大学国史研究室の助手であり、喜田と「最も関係の深かった」と記されるほど親密な間柄であった（注5）。なお、宛先となっている「仙台市東二番丁八六」の「虎岩」宅とは喜田の仙台における居住地であり、山本も同所に住んでいた（注6）。

ちなみに、喜田新六に贈られた『源氏物語関係書解題』とは、1932年4月に東北帝国大学図書館が発行した書籍であり、その「凡例」に「本篇は東北帝国大学附属図書館蔵源氏物語関係書を解題せるもの」とあるように、図書館で所蔵する源氏物語関係の書籍に解題を付したものである。

また、このハガキを挟んでいた資料8の巻末にある白紙部分には、喜田の筆で「拝啓久しく御音信に接せず御近況如何と存じ居り御座候ところ昨日仙台」と、手紙の草稿らしきものが記されている。これは、喜田が新六への手紙を書こうとした形跡と考えられ、そのために資料8に挟まれていた可能性も想像できる。

3. 本資料の位置づけ

ここまで、喜田貞吉関係資料を二つに分類し、それぞれについて考察を加えてきた。ここからは、回顧録などの周辺資料を活用して当時の活動を検証するとともに、本資料からわかることをまとめることとする。

1933年4月に刊行された喜田の自伝『六十年の回顧』によると、1901年（明治34）に文部省に就職してからは自分の研究に関する時間を作ることができず、自分の「専門の研究」に取り組むことができるようになったのは「明治三十七年以降」であったと記されている。その研究について、喜田は次のように述べている。

単に歴史地理と言っても範囲が広い。その中で自分はまず国司制度の崩壊、荘園の勃興から、引き続き武士の興起、守護地頭の配置、群雄の割拠、諸大名領知の沿革というような、地方的権力の移動、統治の変遷、引いてはそれが地方の人文地理上に及ぼした影響というような、大きなものを纏めてみたいと考えた。それは自分が帝大在学中、二学年の時の試験論文の一としてこれを三上先生に呈し、卒業後始めて『史学雑誌』で発表したところの、「国司制の変遷」というようなことから興味を覚えたためであった。しかしなにもぶんに大きな問題で、それを纏めることは容易でない、さし当りまず徳川時代の大名の沿革という方面から手をつけて、漸次古きに及ぼし、畢生の事業としてこれを完成したいという考えであった。（注7）

このような回想から、喜田が文部省にいた1904年（明治37）以降、自らの研究として「徳川時代の大名の沿革」というテーマで調査をおこなっていたことがわかる。

また、喜田が死亡した後に発行された雑誌『歴史地理』の「喜田博士追悼録」では、蘆田伊人が「大名所領地調査の追憶」(注8)として、次のような文章を寄せている。

回顧すれば明治四十一年の秋、当時私は帝大の史料編纂係にお世話になつて居たが、或る用件で内務省の地理係に赴き地理局時代から勤めて居らるる若宮銀二郎氏に就き、種々お尋ねをしたことがあつた。其の時私の直ぐ目に付いたものは、若宮氏の側に在る古びた百巻入の大きな書物箱であつた。それで何となく、之は何であるかと尋ねたら、同氏は其の中の一冊を取り出して私に示され、やがて云はれるのには、此は日本全国の村々一村づつの旧草高と旧所領者名とを調べた帳面で明治十三年に内務省の地理局で編纂した「国郡所轄沿革図表」の基本材料となつたものであると説明せられた。

ここでは、「明治四十一年の秋」に、東京帝国大学史料編纂係にいた蘆田伊人が、内務省地理係の若宮銀二郎から「国郡所轄沿革図表」の基本資料となつた「帳面」を紹介されたことが記されている。資料の説明を聞いてその重要性を考慮した蘆田は、自費で「筆生」を依頼して「一ヶ年半」をかけて謄写させたという。さらに、その後の経過については、次のように述べている。

而して其の謄写する時、私は若宮氏に就いて一冊乃至二冊づつを借用し、之を写すれば直に返却して、また次の必要な冊を借用する方法をとつてゐたが、どうかすると、新に借用しようと思ふ冊が他に貸し出されてあることが屢々あつた。どうも変だ。かうした昔の草高や所領の取調帳が、今時さう必要である筈はなく、而も内務省にこんな取調帳があるといふことを知つてゐる人が多くないのに、一体何処の何人が借りてゐるのかと若宮氏に尋ねたら、若宮氏は使用者は誰であるか明かに判らないが、いつも文部省から小使が借りに来るのだと答へられた。そこで私は益々変に思つたが、まさか、喜田博士が使つて居らるゝとは思はなかつた。然しそれは私の迂闊であつて、この時博士は已に「明治四年廢藩置県後一使三府七十二県図」や「明治九年一使三府三十五県一藩図」やまた是に関した論文を頻りに「歴史地理」誌上に発表せられてゐたので、其の調査必要上より之を使つて居られたのであつたのである。その後不図したことから、博士と私との間にかの取調帳の話が出て、それではあの時、お互に借らうとすると、其の冊が他に貸し出されてあつたので誠に不自由を感じたが、それが、二人の間で争奪戦が行はれてゐたのであつたのかと大に笑はれたことであつた。これが奇縁となつて、終に大正七年の四月から東照宮三百年記念会から研究補助費を給せられて、故坪井九馬三博士の指導の下に喜田博士が豊臣氏の大名と徳川氏の大名の幕末の分、私は徳川氏大名の古い部分即ち寛文四年の大名の分を分担してお互に調査することになつたのである。

蘆田が内務省から「取調帳」を借りようとする、貸し出し中である場合がしばしばあり、不思議に思った蘆田が若宮に質問すると、「文部省から小使が借りに来る」という。その文部

省から使いを出して取調帳を借用していたのが喜田であり、そうした「奇縁」によって、「大正七年」から大名についての共同研究をおこなった、という顛末がユーモラスに描かれている。

このような回想から、1908年（明治41）から1年半にわたって蘆田が資料を書き写そうとしていたことと、同時期に、同じ資料を喜田も借用していたことが明らかとなった。

「1. 大名所領関係資料」で検討を加えた【資料B】において、若宮から喜田が借用していたのは「藩高一覧」という資料であり、その時期も若干早い（「明治四十一年一月四日」以前）、似た性質の資料を近い時期に同一人物を通して借用していたことがわかる。このようにして、当時の喜田が内務省の資料を活用して大名領地などに関わる検証をおこなっていたことが、周辺資料からも確認できた。

なお、その記述に続いて紹介されている「東照宮三百年記念会」から補助を受けて喜田と蘆田が共同で調査をおこなったことについては、当時、雑誌『民族と歴史』に喜田が連載していた「学窓日誌」などでも触れられている。例えば、1922年（大正11）5月の第7巻第5号では「大名領地図脱稿」として、それまでの経緯や今後の見通しなどについて（注9）、その次号（1922年6月）では「大名領地図納付」として、作業の進捗状況などについての記述が見られる（注10）。

さらに、山本枘蔵が喜田の追悼記念論集に寄せた「喜田貞吉先生小伝」においては、その事業は次のようにまとめられている。

大正七年東照宮三百年祭記念会から補助を受けて大名領地の調査に従事し、大正十一年の春まで熱心に続けられた。領地図が完成したのみで他は予定通りの進行を見ずして終ったことは先生の為にも学界の為にも大なる恨事であるが、兎も角歴史地理に関する問題として先生が傾倒された最後の大きな仕事であった。（注11）

以上のことから、喜田が取り組んでいた大名領地についての調査活動は、1918年（大正7）から約4年にわたって実施された、蘆田との共同作業などに結びついていたことがわかった。ただし、そうした活動は、喜田の「歴史地理」に関する業績の中では「最後の大きな仕事」として位置づけられるものの、「予定通りの進行を見ずして終った」というように、未完のままで喜田が死去したようである。

次に、「2. 地理学講座原稿」において分析をおこなった、1932年（昭和7）の『地理学講座』についても周辺資料を見てもいいこととする。

前述の『六十年の回顧』の中では、東照宮三百年祭記念会による事業が「世界大戦による財界の急激なる変動」などの悪条件のために「未定稿」を残したままで終結した状況を説明した上で、喜田は次のように述べている。

なお未定稿の分も、なんらかの形で完成したく、取りあえず昨年（1932年・・・引用者注）中に『地理学講座』発行書肆地人書館の需めに応じ、幕末における各大名の居城の沿革、

ならびにその大名家の領知の変遷に関する梗概を抄録して「幕末大名封邑居所沿革一覧」と題し、略地図を添えて右の『地理学講座』に納めたことであった。これはもちろん単に目録程度のものに過ぎないが、それでも八ポの小活字ベタ詰にして、約百五十頁の紙面を塞いでしまった。(注12)

この記述から、資料6～10を原稿として『地理学講座』に掲載した「幕末大名封邑居所沿革一覧」は、「目録程度のものに過ぎない」と喜田自身に評価されてはいるものの、それまでの大名領地研究における「未定稿」の一部であったことがわかる。このことから、「1. 大名所領関係資料」部分と「2. 地理学講座原稿」部分とが密接に関わっていることは明らかである。

資料1～5の大名所領関係資料は、具体的な日付記述が含まれている資料1(1908年1月)以外は、詳細な年代比定が困難である。ただし、資料2～5は、資料1や内務省の「取調帳」などを参照しながら作成されたものと推測できるので、大正中期の東照宮三百年祭記念会による事業が一段落するくらいの時期までは活用されていたと考えられる。

また、資料6～10の地理学講座原稿の年代が1932年であることは検証してきた通りであるが、この原稿を作成するために資料1～5の大名所領関係資料が参照されていたと考えられる。そのような関係性は、これらの資料が同じ場所に収蔵されていたことからもうかがわれる。つまり、資料6～10の地理学講座原稿を作成するために、資料1～5の大名所領関係資料がどこからか持ち出されてきて、そのまま一括して保存されていた、という経緯を想定できるのである。

おわりに

ここまで、資料に残された記述のほかに関係者の回想録などを参照しながら、東北大学日本史研究室で見つかった「喜田貞吉関係資料」について分析を進めてきた。その結果、これらの資料は2種類に分けられ、それらは作成年代に10年以上の開きがあると考えられるものの、密接な関係を持っている可能性があることが明らかになった。

「大名所領関係資料」と分類できる資料1～5は、喜田が近世大名に関する研究をおこなう際に作成・利用した研究資料であり、喜田が文部省にいた明治末から東照宮三百年祭記念会による事業が推進された大正中期にかけて、作成・使用されたものと考えられる。

「地理学講座原稿」と分類できる資料6～10は、1932年(昭和7)に『地理学講座』(地人書館)に喜田が連載していた「日本の歴史地理 [続]」の「幕末大名封邑居所沿革一覧」部分の原稿である。また、その執筆のために、前述の「大名所領関係資料」が活用されたと考えられる。

さらに、その原稿の中には、喜田の二男・喜田新六から喜田の弟子・山本枳蔵へのハガキが含まれていた。その内容は書籍の受領などに関する一般的な礼状と思われるが、喜田本人を含めた人間関係を示す資料として紹介した。

なお、本稿においては、資料の時期設定や背景について多くの紙数を費やしたが、その内容、つまり歴史学研究としての大名領地の問題については、ほとんど考察を加えなかった。これからの大きな課題として、ここまで検証してきたような資料的な分析を深めるとともに、日本近世史や史学史的な観点などからも本資料に検討が加えられることを期待したい。

【付記】

喜田貞吉関係資料が発見された2000年当時、筆者（伊藤大介）は宮城県古川市（現在は大崎市）の吉野作造記念館の職員であった。その後、東北大学日本史研究室の大学院生を経て、現在は東北大学東北アジア研究センターに勤務している。本稿のような資料分析をおこなうことができたのは、筆者がかつて喜田貞吉と南北朝正閏問題の関わりについての論考（伊藤大介「南北朝正閏問題再考」（『宮城歴史科学研究』第45号、1998年））を執筆したことなどを考慮いただき、資料をお預けいただいたおかげである。

貴重な資料を長期にわたりお貸しくださった日本史研究室にお礼申し上げるとともに、いろいろと便宜を図っていただいた今泉隆雄教授、関連資料の収集などを手伝ってくれた大学院生の風間亜紀子氏に対して、この場を借りてあらためて謝意を表したい。

注

- (1) 東北大学日本史研究室の今泉隆雄教授には、文中に掲げた資料のほか、喜田貞吉の自筆が掲載されているパンフレットなども紹介いただいた。
- (2) 内務省地理局の人事などについては、横山伊徳（2004）に詳しい。
- (3) 喜田貞吉（1982）の「著作目録」（伊東信雄編集）の596頁。
- (4) 喜田新六（1972）巻末の「故喜田新六氏略歴」による。
- (5) 東北帝国大学国史学会（1942）の「序」（古田良一執筆）より。
また、伊東信雄は座談の中で山本柝蔵のこと次のように回想している。
「当時は助手は一年交替でしたが、山本さんは喜田先生が京都からつれてこられたひとなので特別扱いで、病気でやめられるまで、長く助手でおられました。親切なひとで学生は皆世話になりました。」（伊東信雄（1984）の「座談記録」部分（17頁）より）
- (6) 山田野理夫（1976）の583および588頁。
- (7) 喜田貞吉（1982（初出は1933））の105～106頁。
- (8) 蘆田伊人（1939）の236～238頁。
- (9) 喜田貞吉（1979（初出は1922））の244～247頁。
- (10) 喜田貞吉（1979（初出は1922））の267～268頁。
- (11) 東北帝国大学国史学会（1942）の「喜田貞吉先生小伝」（山本柝蔵）の275頁。
- (12) 喜田貞吉（1982（初出は1933））の174頁。

引用・参考文献

蘆田伊人 1939

「喜田博士追悼録 大名所領地調査の追憶」『歴史地理』第74巻第3号、76—78頁

伊東信雄 1984

「講演 ミネルヴァ論争の頃 —喜田貞吉先生の憶い出—」『国史談話会雑誌』第25号、1—21頁

喜田貞吉 1979

「学窓日誌」『喜田貞吉著作集 第13巻 学窓日誌』、東京：平凡社

喜田貞吉 1982

「六十年の回顧」『喜田貞吉著作集 第14巻 六十年の回顧・日誌』、東京：平凡社

喜田新六 1972

『令制下における君臣上下の秩序について』、伊勢：皇学館大学出版部

佐伯啓造（編） 1940

『唐招提寺の新研究 南都七大寺叢書卷三』、奈良：夢殿論誌編纂所

東北帝国大学国史学会 1942

『喜田博士追悼記念国史論集』、東京：大東書館

山田野理夫 1976

『歴史家 喜田貞吉』、東京：宝文館出版

横山伊徳（研究代表者） 2004

『内務省地理局における地図蓄積＝管理構造の復原的研究 科学研究費補助金研究成果報告書』、東京：東京大学